

1931年の『突貫勘太』： 疑似科学の表象と時代状況の関連

木 村 建 哉

序

本論者においては、映画『突貫勘太』 *Palmy Days* (1931年、エドワード・サザーランド Edward Sutherland (1895-1973) 監督) を、そこに現れる様々な疑似科学の表象と時代状況との関連という観点から分析する。

この映画については既に木下千花による分析があり(木下2000)、ミュージカル・ナンバーの振り付けと演出を担当したバスビー・バークレー Busby Berkeley¹⁾ に焦点を当てつつ、モダニティ、アメリカニズム、産業過程機械化、身体の規格化といった幅広い文脈から詳細な議論を徹底的に展開しており、これらの点について筆者が木下の議論に付け加えるべきものはほとんど何もない。なお、1933年以降のワーナー・ブラザーズ時代のバークレーがミュージカル・ナンバーを振り付け、演出し、時に作品全体をも演出した作品群については、宮本陽一郎が、モダニズム、マシーン・エイジといったやはり幅広い文脈から詳細に論じている(宮本1997→2002)。この両者による業績からは、本論文を執筆するに当たって大きな刺激と恩恵を受けたことを先ず明らかにして、お二人に対する感謝の念を示したい。

その上で、筆者がこの論文で行いたいのは、もう少し微視的な議論であり、『突貫勘太』に現れる様々な疑似科学(降霊術、占いによる予言、手相占い、優生学、インチキな催眠術等)の表象が、同時代の文脈とどのように関連し、観客の欲望や願望をどのように反映し、また増幅し、特異な形に形成したかを明らかにすることである。

言うまでもなくアメリカは、そして世界は、この映画の主たる撮影が行われた1931年の5月、6月²⁾ からアメリカでこの映画が公開された9

月下旬から10月以降³⁾においては、大恐慌 (Great Depression/Crash) のただ中にあった。しかし、1929年の10月24日、いわゆる「暗黒の木曜日」に始まるとされる大恐慌は、初めから大恐慌として認識されていたわけではないし、一直線に展開したわけでもない。本論考ではまず、『突貫勘太』公開当時の1931年末までの大恐慌の展開を概観し、またそれが大衆からどのように捉えられていたかをある程度把握した後⁴⁾、この映画における疑似科学の様々な表象と1931年の時代状況の関連を明らかにする。

こうした考察を通じて、映画の冒頭にクラークス・ベーカーリーの建物に掲げられている標語の一つ「メッセージ付きのカスタードパイ／教訓スラップスティック・コメディを伴うドタバタ喜劇 (Custard Pies with a Message)」⁵⁾に含まれる教訓とはいかなるものであるかが明らかとなり、『ジャズ・シンガー』*The Jazz Singer* (1927年、アラン・クロスランド Alan Crosland 監督) の刺激によって始まった第一次ミュージカル映画ブーム (1928-29) と『四十二番街』(1933年、ロイド・ベーコン Lloyd Bacon 監督) に始まる第二次ミュージカル映画ブーム⁶⁾の狭間のミュージカル映画にとっては冬の時代に、なぜ『突貫勘太』が例外的な大ヒットとなったかの理由も示すことが出来るだろう⁷⁾。またこうした微視的な分析は、木下や宮本の巨視的と言って良いであろう分析と通じ合う部分も出て来るはずである。

なお、大恐慌の時期の切り分け方は、既存の研究書を参考にしたが、多分に便宜的なものである。

1. 大恐慌の1931年までの展開の概観

1.0. 幾つかの前提

大恐慌の1931年までの展開を概観する前に、幾つかの前提を確認しておきたい。

第一に、大恐慌はしばしば、投機的な株式ブームが主要な原因であると考えられているが、実際には实体经济に起因する部分も大きかった、ということである。例えば佐美光彦は、恐慌の要因となった实体经济上の問題点として、住宅建築の急減、自動車需要の一種の「飽和」状態へ

の接近、農業・中小企業等の著しい停滞を挙げ（侘美 1994:413-414）、また、株式ブームに関しては、それが「たんなる資金的バブルの高揚と崩壊として理解されるだけでは不十分であり、その背後に、それを必然化する […] 市場機構が存在した」ことを指摘している（同上:415）。侘美の言う株式ブームを必然化する市場機構とは、当時の株式市場における証券取引が、証券価格の25%にあたる証拠金を現金で支払えば基本的に完了したというものであり、購入証券を担保として残りの4分の3は株式ブローカーから貸し付けられ、さらにブローカーに対しては、その所有する証券を担保として銀行を代表とする他の貸し手からいわゆるブローカーズ・ローンが提供されるというもので（同上:415-416）、これは株式を代表とする証券の価格は上がり続けることを前提とした仕組みであり、証券の価格が急落すれば、証券を買った（企業を含む）顧客は追加証拠金の支払いに追われることに成り、もし払えなければ担保としている購入した証券を失い、大きな損失を被るというものであった。

また、侘美や林によれば、多くの経済学者は、アメリカにおける恐慌が世界恐慌にまで拡大した重要な要因として、第一次世界大戦後には世界経済の中心となっていたアメリカが、イギリスに代わって国際金融システムにおいてその責任を果たす準備も意志も持っていなかったことを挙げている（侘美 1994:659-688、林 1988:212-218）。

ただし、経済学者を除く一般の多くの人々にとっては、大恐慌は、一部の悪質な投資家が主導した投機的な株式ブームとそれに制限を加え統御するリーダーシップの不在に対する報いと考えられていたし、そうした見方はおそらく現在に至るまで根強く存在する。ジャーナリストのゴードン・トーマスとマックス・モーガン＝ウィッツは、1924年10月24日の「暗黒の木曜日」の後に、10月29日の「暗黒の火曜日」において株価の暴落が決定的となったことについて1979年に次のように述べている（ただし、後述するように、1929年10月29日の時点では、恐慌は、恐慌としてではなく、景気循環による不況の規模の大きいものと考えられていたことには注意が必要である）。

世界一金持ちの国アメリカは、たしかにその歴史のなかで最も金持ちになった […] そのアメリカにいま、数かぎりない一攫千金をねらった策略や、買い占めグループによる株価操作、不正操作、証拠

金をぎりぎりにおさえた最低価格や劣悪な株券のカラ買いなどを許したことに對するツケが、まわってきたのだ。実業界、政界の優柔不斷な、時として誤解を招くリーダーシップが、全国的に株の大量売りが殺到する一因となったのである。(G・トマス& M・モーガン=ウィッツ 1998b:304)

あるいは、大恐慌を切り抜けた実業家アーサー・A・ロバートソン Arthur A. Robertson は次のように回想する。

1929年には、あそこ〔ウォール街〕はまさに、いかさまサイが使われるカジノでした。少数の詐欺師が多数の赤ん坊を騙していました。デタラメな取引をしていました。1921年に景気の後退があり、私たちはそこから1924年頃に抜け出しました。すると掛け金の制限無しの上昇、急騰です。あのポンツイ*が素人に見える狂乱の金融です。私は、靴磨きの男の子達が5万ドルの価値のある株を500ドルの現金で買うのを見ました。全てが、見込み〔hope〕に基づいて買われていたのです。

* 20年代のボストンの金融業者。彼の「帝国」は瓦解し、多くの人が破滅した。彼は刑務所行きだった。〔原註〕(Terkel, Studs 1970 → 1971:85)⁸⁾

彼もまた、規制がないところでの詐欺的な投資家による投機的な悪質な取引の内に恐慌の原因を見ている。言い換えれば、当時の（そして恐らくは現在でも）多くの人々にとっては、恐慌は自分達とは関係のないところで一部の悪質な詐欺師的投機家達によって引き起こされたものであり、いきなり降りかかってきた、ほとんど天災とさえ言っていいい様なものであった。

第二の前提として注意すべき点は、後述するように大恐慌は1929年10月24日の「暗黒の木曜日」以降一気に進行したわけでは決してないということである。株価がしばらく下げ止まり、経済指標がいささか回復する局面もあったのであり、そうした一直線ではない恐慌の進行のなかで、『突貫勘太』が製作され、公開された時期がどのような状況であったのかを見極める必要がある。

この点と関連した第三の前提としては、後述するように大恐慌は1929年10月末から1930年前半位までは、景気循環の中での通常の不況の規模の大きいものとして捉えられていて、それが世界的な規模の大恐慌にまで至るとは認識されていなかったことである。『突貫勘太』が製作され、公開された時期には、恐慌は既に恐慌として捉えられていたのであるが、それはどのような経緯を経てであったのが問題となろう。

以上のような諸点に注意しつつ、大恐慌の1931年までの展開を時期ごとに概観していくことにしよう。

1.1. 1929年10月末から12月までの大恐慌

後になって大恐慌、世界恐慌と認識される事態は、1929年10月24日の「暗黒の木曜日」に始まったと一般には信じられているが、事実それはそれほど単純ではない。1929年3月には小さな暴落があり⁹⁾、金融関係者、金融相談所、一部の報道機関などが、普通株が高騰していることに警告を発していた（林1988:6）。株価は信じられない水準に達しており、「二九年を通じて、ニューヨーク証券取引所上場株式の平均株価収益率（PER= 株価の「一株あたり利益」に対する倍率）は三〇倍、平均で株価はその会社の「一株あたり総資産簿価」の四二五%の水準にあった。」（同上）

このような異常な状態が続くはずがない。ダウ工業株平均（ダウ・ジョーンズ指数）は1929年9月3日にピークを迎えるが（林1988:7、侘美1994:500）、投資会社の中には株価の後退を予測して顧客に株の売却を勧めるところも出始め、9月3日以降には、株価の相場はいささか幅の大きい下降と上昇を繰り返す展開となっていた。10月には、第一週に株価が下落し、第二週に元に戻り、第三週には暴落した。（林1988:7）そして「暗黒の木曜日」の前日である10月23日には、ダウ工業株平均は325ドルから305ドルにまで暴落し、株価は1929年当初の水準にまで後退した（同上、侘美1994:502）。

「暗黒の木曜日」には、追加証拠金を払う必要のある、あるいは株価がそれ以上下落する前に手持ちの株を出来るだけ早く処分したいという投資家達の売り注文を受けて、多数の証券業者がニューヨーク証券取引所の開く午前10時を待ち構えていた。大量の取引が成立する内に株価は下落を続け、市場は大きなパニックに見舞われた（林1988:8-9）。た

だし、しばしば信じられているように、こうした事態が一日、あるいはそれ以降ずっと続いたわけではない。昼頃からJ・P・モルガンを主幹とする「銀行家グループ」が主力株である特定銘柄を買い支え、ダウ工業株平均は最安値の272ドルから終値の299ドルまで回復した（林1988:11、侘美1994:502）。もちろん、追加証拠金を払いきれなかった投機家や主として小口の投資家に大きな損害は出たが、恐慌は「暗黒の木曜日」から始まったわけでも、そこから一気に進行したわけでもないのである。

その後の25日と26日には株価は安定しており、25日にはハーバート・フーヴァー Herbert Hoover 大統領は新聞記者に対して「この国の基本的な取引、つまり商品の生産と分配は健全で繁栄の基盤に立っている」（侘美1994:502-503より再引用）という有名な発言を行う。財界人達からも楽観的な発言が相次ぎ、このパニックでは企業倒産の徴候も銀行倒産の徴候もないという報道も加わって（侘美1994:503）、「投機家達は当然の報いを受けたが、二四日の暴落は企業活動に影響を及ぼすことはないだろうという見方が広がっていった。」（林1988:14）

しかしそうは行かなかった。10月28日の月曜日には、ニューヨーク証券取引所では取引開始とともに投げ売りが始まり、ダウ工業株平均は、一日の下げ率としては空前の14.8%、38ドルの暴落となり（林1988:14）、翌10月29日（「暗黒の火曜日」）には、終値はダウ工業株平均30ドル減の230ドルとなった。前日の28日を含む二日間の下げ幅は、ダウ工業株平均で60ドル、20%にも達し、主要銘柄の中には40-50%も下落する株が多数あった（侘美1994:503）。

だが株価は、11月中旬には下げ止まり12月には緩やかに上昇し始めた（同上:505）。

この時期には大恐慌はまだ大恐慌としては認識されておらず、景気循環の一環としての不況のいささか規模の大きいものであって、景気後退は通常的で短期的であるという見方が支配的であった。こうした見方の代表者はフーヴァー大統領であるが、29年末から30年前期にかけては、アメリカでもイギリスでも、ほとんど全ての経済学者（その中にはケインズも含まれる）や経済誌がこうした見方を共有していた（侘美1994:541、598-599注11）。この時点では大恐慌は近い内に終わると信じられており、こうした見方は大衆にも共有されていたであろう。

1.2. 1930 年前半の大恐慌

フーヴァー大統領といえば、後に大恐慌と呼ばれることになる事態は景気循環の一環としての不況に過ぎず、対策らしい対策をほとんど行わなかった、としばしば信じられているが、実際にはフーヴァーが「不況」への対策を行わなかったわけではない。フーヴァーの不況対策の基本は総需要の減少を食い止めることであり（林 1988:83）、その主要なものは次の三つである（佐美 1994:539-541）。

第一に、農産物価格下落阻止政策である。フーヴァー政権は、1930 年前半期に「穀物安定公社」や「綿花安定公社」等を設立し、それらの機関に大量の政府資金を直接的に融資することで、過剰農産物を買収しようとした。その結果、小麦や綿花の価格は 30 年 4、5 月頃にはやや上昇したが、当局による購入在庫が増加を続ける結果となり、恐慌の進行とともに激化する農産物の価格崩落を食い止めることは出来なかった。

フーヴァーの主要な「不況」対策の第二は、公共事業及び公共建設のための投資促進政策だった。フーヴァーは、既に 29 年 11 月中旬から下旬にかけて、産業・労働・建設・農業・公益事業の五分野の指導者をそれぞれ集めて会議を開催し、投資拡張計画の推進を説得した。また、フーヴァーは全州知事に州及び都市による公共投資の協調的拡張計画を促した（林 1988:83）。それとともに、議会には 4.23 億ドルの連邦建設計画を提案し、商務省内には公共建設部門を設立して公共投資の拡張を促進した。この第二の対策は一定の効果を持ち、1930 年に入ってから工業生産は急速に回復し、1928 年以降の住宅建設の減少を食い止めることは出来なかったが、商業建築については、1929 年 12 月に大きく落ち込んだ後、1930 年の前半には前年の秋の水準にまで回復した（林 1988:85）。1930 年の 1 月から 3、4 月にかけては、短期的で極緩やかであるとはいえ、景気の回復が見られたのだ。だがこうした効果は限られたもので、中小企業の投資と住宅投資の大幅な減少の前では持続的にはなり得なかった。その背景には、公共事業は州及び地方政府のレベルで行うべきであり、借入れによってまで連邦政府が主導・拡大するべきものではない、というフーヴァー大統領の考え方があり（林 1988:92）、公共事業及び公共建設のための投資拡大は規模の限定されたものとならざるを得なかったことがある。

フーヴァーの主要な「不況」対策の第三は、賃金下落阻止政策であり、1929年11月21日の会議において、財界の指導者達に賃金の切り下げの拒否と、賃金固定化政策への協力を約束させた。その結果、1930年中に賃金を切り下げた企業は主要100社の内で7社にとどまり、これは1921年の不況の時に主要100社の内92社が賃金を引き下げたのとは対照的であった（林1988:89）。ただし、こうした賃金下落阻止政策の効果は大企業のフルタイムの被雇用者に限定されるものであり、中小企業の従業員や農業従事者、あるいは大企業が賃金を固定化する以上、解雇や労働時間の削減によって「不況」に対応せざるを得なかったために当時急増しつつあったハーフタイマーやパートタイマーを救うものとはなり得ず、その効果は限定的であった（侘美1994:546-548）。

フーヴァーは一般にしばしば信じられているように、経済を成り行きに任せれば景気循環によって「不況」が終わると考えて何もしなかったわけではない。しかし、フーヴァーの「不況」対策は、総じて「規模がはなはだ小さすぎ、きわめて遅すぎた」ため（秋元1999→2009:79）、その効果は限定的であり、景気回復をもたらすものとはなり得なかった。

1.3. 1930年後半から1931年前半の大恐慌

1930年の1月から3、4月にかけては、短期的で極緩やかであるとはいえ、景気の回復が見られたと先に述べたが、その間にも製造業の雇用は低下を続け、5月からは生産は前年を上回るペースで下落を始めた。需要不足が解消しないことから、物価は更なる下落を続け、雇用はさらに削減された。（林1988:86）

そうした事態をさらに悪化させる法律であるスムート・ホーリー法が、6月に成立する。この法律は、900近くにも上るアメリカの輸入商品項目に追加関税を認めるものであり、アメリカの輸入関税は平均33%から過去最高水準の平均40%に引き上げられた。（林1988:90）この法律の結果として、ヨーロッパ諸国に発する報復措置としての関税引き上げ競争が始まり、世界貿易の縮小がさらに促進され、第一次世界大戦終了後の需要の減少を起因として「20年代に一般化していた世界農業不況は、事実上30年中に世界農業恐慌に転化した」（侘美1994:588-589）¹⁰⁾。

秋には南西部を大干ばつが襲い、農業の不振に追い打ちをかけた。10月から12月にかけては北西部を中心とする幾つかの州で多数の銀行が

倒産し、12月にはニューヨーク州の合衆国銀行（民間銀行である）の倒産という、それまでの最大級の銀行倒産が起こった。（林 1988:87）この「30年10月から始まり12月をピークとし、翌年2月にほぼ収まった銀行破産の連鎖的広がり」は「第一次銀行恐慌」とも呼ばれ（それが収まったのは連邦銀行の介入による）、「伝染病のように、経営の脆弱な諸銀行に対する預金の取り付けとなって拡大していった」（佐美 1994:617）。いまだ大都市の大銀行の連鎖的倒産には至っていないが、「11～1月の3ヶ月で破産した銀行数は約800行、その預金総額は6.3億ドルにのぼった」（同上:619）というのはいまだ事ならぬ状況である。

政府関係者、金融業者や経済学者には限られない誰の目にも、事態が景気循環による一時的な不況ではなく、恐慌、それも大恐慌であることがはっきりしたのは第一次銀行恐慌の始まった1930年後半のことであろう。『突貫勘太』の中ではエディー・カンター Eddie Cantor 演ずる主人公のエディー・シンプソン Eddie Simpson がクラークス・バーカリーの社長の娘ジョーン Joan（バーバラ・ウィークス Barbara Weeks）との会話の中で「恐慌は1930年のことだった（The Crash was in 1930）」（DVD, ch.11, 00:27.57-）と発言しており、当時の人々にとって恐慌が恐慌として認識されたのは1929年ではなく1930年（の後半）であったことがここからも理解出来る。

アメリカの経済状況は1931年に入ってから更に悪化する。第一次銀行恐慌は、30年12月のピークの後、連邦銀行の介入により2月には収束するが、第二次銀行恐慌の波が、早くも3月からゆっくりと拡大を始めていたのである。（佐美 1994:619-620）

景気の更なる悪化をより一層深刻なものとする銀行恐慌がヨーロッパで起きる。オーストリアでは5月以降銀行恐慌が進行し、国立銀行は各銀行の救済を図るが、その結果同行の金・外貨準備は急減し、オーストリアは実質的に金本位制を放棄するに至る。（佐美 1994:620-630）

続けて、あるいはほぼ同時に銀行恐慌に襲われるのがドイツである。もともと不景気であったドイツでは、アメリカでの恐慌の発生とともに外需が急減した結果、生産、投資の急速な減少が失業者の激増と国内需要の更なる減少を招いた。財政赤字は拡大したが、ドイツ政府は、第一次世界大戦の賠償を最優先して健全財政主義を貫き、デフレ政策を強行

して恐慌をさらに促進した。ドイツ経済は外国短期資金に大きく依存していたが、オーストリアの銀行危機によって外国債権者の不信が高まると、ドイツの銀行からも外国の預金と（主として英米からの）大量短資の引き揚げが始まり、7月15日にはドイツ政府は金本位制の実質的停止に追い込まれる。（佐美 1994:630-641）

フーヴァーは手をこまねいてこうした事態を見ていたわけではなく、6月5日には賠償支払いモラトリアム案をメロン財務長官に提案し、20日には他の重要な債権国の同調という条件付きで1年期限のモラトリアムとして公表する。しかし、アメリカの次に損失を最も大きく受けるフランスの反対が強く、モラトリアムがフランスによって承認され発行するのは7月6日になってのことであり、これはいささか遅きに失し、この間にもドイツ恐慌は急速に進行した。（佐美 1994:637、林 1988:94）

なお、先述したように『突貫勘太』の撮影時期は1931年の5月から6月頃と推定されるから、まさにこの映画が撮影されていた時期にオーストリアやドイツで銀行恐慌が発生したのであるが、それがどの程度スタッフやキャストに影響を与えたかは定かではない。ほとんどのアメリカ国民の目は国内の状況に向けられていたからだ。しかし、オーストリアやドイツでの銀行恐慌の結果として生じたヨーロッパの金融状況は、『突貫勘太』の公開時にはアメリカに大きな影響を与えることになるのだが、それについては後述する。

1.4. 1931年後半の大恐慌

こうしたオーストリアやドイツにおける銀行恐慌、さらには恐慌一般の拡大を受けて、次に標的となったのがイギリスである。7月13日から、ポンドに対する激しい取り付け（外国短資の引き揚げ・金兌換）が始まり（佐美 1994:642）、9月21日にはイギリスは金本位制を離脱した。イギリスには最早、アメリカと並ぶ国際通貨体制の基軸国としての役割を果たす経済力は残されていなかった。ポンドは、金本位通貨であるドルとフランに対して価値が暴落し、イギリスに続いて英連邦やポンド取引圏に所属する諸国も相次いで金本位制の停止に追い込まれ、更に31年中にはカナダ、ポルトガル、日本、そして主要東欧諸国も次々と金本位制の停止、あるいは実質的な停止へと追い込まれた（佐美 1994:648-649、659）。ポンド・ドル体制の崩壊である。

イギリスの金本位制からの離脱が今度は、アメリカからの金の大量流出と債務の引き揚げを引き起こした。各国の銀行が、ドイツやイギリスで蒙った損失に対して金準備を確保し、また損失を埋め合わせようとしてアメリカの銀行預金を金に換え（林 1988:95）、あるいはドル為替の急落を恐れて対アメリカ短期債権を一斉に引き揚げたのである（侘美 1994:660）。9月中頃から10月末までに連邦準備制度が失った金は、7億5500万ドルにもなり（林 1988:95-96）、アメリカ諸銀行の対外短期債務は、9月16日から11月25日の二ヶ月少々の間に6億ドル以上も激減した（侘美 1994:660）。

このような金の大量流出に対して連邦銀行の採用した対策は、公定歩合を2%引き上げるというもので、「大不況の底での金融引き締めは国内政策としては狂気の沙汰」であり（林 1988:96）、金本位制の維持を優先して国内における投資を減少させるこの政策は、31年後半期に外国債券も含む債権の価格の極めて大幅な下落をもたらした。株価も更に一段と下落させ、ダウ工業株平均は、1929年のピーク月を100とする指数で、31年の第1四半期に既に半減以上（44-50）の水準に落ちていたのが、9月以降に再急落し、12月には21にまで暴落した（侘美 1994:668）。株価は、ピーク時の約5分の1にまで落ち込んでしまったのである。

こうした過程と並行して、第二次銀行恐慌が拡大した。3月から5月にかけては銀行預金の引き出しと通貨流通高の増加が緩やかなペースで生じ、オーストリアとドイツでの金融恐慌の影響を受けて、6月前半にはシカゴで約30行、預金総額約6,000万ドルの銀行が倒産した。取りつけ騒ぎは市中大銀行の一つにも波及し、この銀行は他の銀行に吸収された。取りつけ騒ぎはシカゴ地域全体に拡大し、更には他の州や大都市の銀行も閉鎖に追い込まれた。6月中の破産行数は167、破産額は1.9億ドルである。第二次銀行恐慌では、農村部の中小銀行を中心とした第一次銀行恐慌に対して、都市部の銀行にも問題が広がった。（侘美 1994:674-677、林 1988:96）『突貫勘太』の制作（撮影とポストプロダクション）は、こうした第二次銀行恐慌の前半期の真っ最中に行われた。

その後も第二次銀行恐慌は続くが、9月以降には国際通貨制度の崩壊と実体経済の極度の悪化を受けて銀行の倒産は激増し全国的な規模に拡大する。9月から12月までに、1361行が閉鎖され、9.9億ドルの預金が封鎖された。第一次銀行恐慌では預金が地方銀行から都市部の銀行へと

移動したのに対して、第二次銀行恐慌では、預金が金や現金に替えられしばしば退蔵された。民間銀行の危険を前にして預金を郵便貯金に替える者も増えた。(林 1988:96-97)『突貫勘太』は、こうした第二次銀行恐慌のさなかに公開されたのである。

なお、1930年の後半以降には、「フーヴァーには、「教条主義者」「金持ちを優遇する冷たい心の持ち主」「融通の利かない男」「頭の悪い男」というイメージがつきまとうようになっていった」。(林 1988:102)

1.5. 大恐慌の1931年までの展開の概観の総括

ここまで、概観と言いながらやや詳しく大恐慌の1931年までの展開を見てきたが、それが『突貫勘太』の製作・制作スタッフや観客に与えた影響という観点からこれまでの概観を総括しておきたい。

第一に、多くのアメリカ人にとっては、大恐慌の原因は一部の詐欺師的で悪質な投機家の所行であり、それはほとんど突然天から降ってきた災厄にも等しかった。

第二に、とはいえ、大恐慌は、1930年の前半位までは景気循環による不況のいささか規模の大きいものと信じられていて、一時的なものであり、その内終わると思われていた。

第三に、1930年の早い時期までは、株価や景気は、下がって、時にはその後更に急落・暴落するものの、しかし下げ止まったり、小康状態を保ったり、上昇あるいは一時的な回復をしたりし、その度に人々は悪い事態はこれで終わると思ったが、結局その度にその後には更に悪い結果が待っていて、特に1930年後半以降は、最悪だと思われる状況が更に悪くなるという事態が繰り返された。言い換えれば、当初人々の持っていた希望は度々裏切られ、30年後半以降には状況はほとんど絶望的となる一方であった。

第四に、フーヴァー大統領は恐慌に対して無策だったのではないが、その対策の効果は限定的で、明らかな失策もあり、一般国民の間でもそのイメージは地に墜ちていった。

第五に『突貫勘太』は、最悪だと思われていた状況が更に悪化する中で制作され、本当にこれが最悪だと思われていた状況がまた激しく悪化する中で公開された。

以上概観して来た状況が『突貫勘太』の作品内容やその受容にどのよ

うな影響を与えているかを作品における疑似科学の表象との関連において、次に見て行くこととしよう。

2. 『突貫勘太』における疑似科学の表象と時代状況

先ず議論の大前提として。疑似科学とは何かについて述べておこう。石川幹人 2016:5 は次の様に述べている。

疑似科学とは、科学の装いをもった現実描写の物語である。科学の装いによって信憑性を上げている巧妙な物語なのである。

科学的な根拠を欠きながら、あたかも科学であるかの様に振る舞って人々を欺いているのが疑似科学であり、近代科学の成立とほとんど同時に登場し、現在まで存在し続けている。代表的なものを極々少数上げるだけでも、1770年代に登場したメスメルの動物磁気説や、19世紀に盛んとなった観相学（骨相学）、19世紀から20世紀、特に1920年代から30年代に猖獗を極めその影響は現在にまで及んでいる優生学¹²⁾、性格診断等々切りがない。公共性の高い地上波のテレビで、星占いや、誰が作成・監修したかも分からない「心理テスト」が垂れ流され続けている。一部の脳科学の様に、一旦は科学的根拠に基づきながら、それを恣意的に拡大した無根拠な言説（例えば「～脳」と言った呼称を用いた尤もらしい説明等）が流布している場合もあり、それも疑似科学である。

我々は判断がつかない場合、何かの助けを求め、時にそれに縋ってしまう。そこに疑似科学が入り込んで来る余地がある。疑似科学が現在の問題でもあるという大前提を確認した上で、議論を先に進めよう。

2.1. 悪としての疑似科学

『突貫勘太』に登場する疑似科学の代表的なものとしては、何よりもインチキ降霊術師・占い師ヨランド Yolando（チャールズ・ミドルトン Charles Middleton）の行う降霊会や水晶玉を用いた占いによる予言を挙げることが出来るだろう。ヨランドとその一味は、こうしたインチキな降霊会や予言によって人々を騙して収入を得ており、占いによる予言を悪用してクラークス・ベーカリーから大量の現金を奪おうとさえして

いる。

一面においては、ヨランドとその一味は、恐慌の原因となった悪辣な投機家達の隠喩となっていると考えられる。とすると、ヨランドに騙され、彼のことを信頼しきっているクラークス・ベーカリーの社長クラーク Clark (ファーストネームは出て来ない、スペンサー・チャーターズ Spencer Charters) は、投機家達に必要な取り締まりを行うことが出来ずに恐慌の発生を赦し、それに対して無能で無策であると一般には思われていたフーヴァー大統領の隠喩である。主人公のエディー・シンプソンが後に結婚相手となるヘレン・マーティン Helen Martin (シャーロット・グリーンウッド Charlotte Greenwood) と初めて会う場面では、ヘレンがヨランドの偽の預言を信じてエディーを運命の人と思い込みいきなり抱き付くのに対して、シンプソンが話をそらすために、飾ってあるクラーク社長の写真を見て「あれは誰？」と尋ねると、ヘレンが「私たちの社長よ。That's our president.」と応え、エディーは「フーヴァーもすっかり変わっちゃったな！ How Hoover has changed.」と発言する (DVD, ch.7, 0:16.30-)。これは“president”のpを大文字と取り違えてのことであり、ヘレンによって直ちに誤りを訂正されるのだが、単なるギャグに止まるものではなく、1928年11月の大統領選挙に大勝しながら (林 1988:67)、今や国民の支持を完全に失ったフーヴァーに対する強烈な皮肉であるのみならず、クラーク社長をフーヴァー大統領と強く結び付けるものであり、その更なる意味合いについては後述する。

クラークス・ベーカリーで働くことになったエディーが、「フランスの有名な読心術師ルドゥー教授 Professor Ledoux, eminent French mind reader」(新聞記事での紹介)に変装してヨランドを騙して、自分を一味から抜けさせるように説得を試みる場面 (DVD, ch.12, 0:32.18-)では、「まだこんなものを使っているか。過去のものだ。過去のものだ。You still use this? Passé! Passé!」と水晶玉を床に放り投げて粉々にし、「まだ手相なんて読んでいるのか。[...] そんなものは全く無意味だ。You still read the palm? [...] It is nothing at all.」と手相の図の掛け軸を破り捨てる。エディーの試みは正体がばれて失敗するのだが、ヨランドに殴り倒されたエディーは「堅気になりたいんだ。I wanna go straight.」と彼に頼む。この場面では、疑似科学の悪の側面に対する激しい否定と拒絶が描かれている。

しかし、疑似科学はこの映画において悪としてのみ描かれているのではない。なぜなら、ヘレンに対する、運命の結婚相手が11時にオフィスを訪ねて来るという予言も（DVD, ch.6, 0:13.23-）、クラーク社長に対する、12時にオフィスを訪ねてくる男があなたの会社を救うのだという予言も（DVD, ch.9, 0:21.42-）、結果的に的中することになるのだから。つまり、疑似科学は一定の有効性・効力を持っている。これは何を意味しているのだろうか。次に、『突貫勘太』における疑似科学の表象を、科学あるいは科学技術への信頼、さらには信仰との関係において検討する必要がある。

2.2. 科学あるいは科学技術と表裏一体のものとしての疑似科学

『突貫勘太』に現れる疑似科学は、一方においては悪であり、それを利用して人々から金を騙し取り、更なる大金をクラークス・バーカリーから奪おうとするヨランドとその一味は、大恐慌の原因となった悪辣な投機家達の隠喩となっている。だが他方で、『突貫勘太』においては、疑似科学は有効性・効力を持っているもの、更に言うならば科学あるいは科学技術と表裏一体のものとしても表象され、信頼・信仰の対象とさえなっている。

クラークス・バーカリーにおけるベルトコンベア・システムは、木下2000:227も指摘する様に、明らかにフォード的、あるいはフォード／テイラー的なのだが、これは、働いている女性達をトレーニングさせ管理しているヘレンが、エディーと初めて会った時の会話の中で「あなたは私のイグニッションキーよ。Baby, you are the key to my ignition.」と言うことによっても強調されている（もちろん、そこには性的な含意もある）。木下は、「フォード的なベルトコンベア・システムと極めて場違いなコーラス・ガールのコラージュ的な並置」（同上）に言及し、ゴールドウィン・ガールズ（『突貫勘太』はサミュエル・ゴールドウィンの製作）が規格化され「品質保証」されたジークフェルド・ガールズの血を引くものであり、「ジークフェルドの美の規格とは、白い肌とバラ色の頬、金髪碧眼で細身の長身という北方ヨーロッパ系のタイプを指した」こと、「このタイプを「ネイティヴな」アメリカン・ガールとして讃えることは、1890年代以来の東・南ヨーロッパ系移民の流入による「アメリカ的なもの」の動揺に対する反動的応答であるばかりではな

く、1920年代に蔓延した優生学的人種理論へと危うく接近してゆくもの」である（木下:231）と全く妥当に指摘している。

木下の言う通り、フォード的なベルトコンベア・システムとコーラス・ガールの並置は、ベーカリーの工場とバスビー・バークレー的な女性の群舞及び彼女等が描く幾何学模様とを接合するためのかなり無理なものである。しかし、クラークス・ベーカリーの工場やパーラーで働くのが全て若い女性であるという設定にかなり無理があるとしても、他方においては、ベルトコンベア・システムによる規格化された製品の大量製造のために労働者もまた規格化・規律化しなければならないという発想は、根拠を全く欠いているとまでは言い切れず、また一定の疑似科学的な説得力を持つものであり、女性達のトレーナー（エディーの言い方では“physical torturer”¹³⁾）かつ管理者であるヘレンが、エディーとの最初の会話の中で、「私たちみたいな立派な身体標本（見本）である二人の人間が結婚するとき、結婚は科学よ。Marriage is the science when two fine physical specimens like us get married.」（DVD, ch.7, 0:17.50-）と言うとき、“specimen”という生物学・医学用語の使用もあり、その発言は上記の発想と一体となった、優生学という疑似科学に基づいた思考に支配されている¹⁴⁾。ここでは、疑似科学である優生学への信仰が、規格化・規律化された優れた身体を伴う機械化大量生産システムによる優れた製品の製造と優秀な子供の誕生につながっている。マシーン・エイジにおける科学技術への信頼が信仰と化し¹⁵⁾、疑似科学的思考とほとんど一体化しているのである¹⁶⁾。

ここで、エディーがクラークス・ベーカリーで得た職が能率（向上）技師（efficiency expert）であることにも注目すべきである。科学技術に基づいて企業や工場の生産効率の最大化を図る仕事は、インチキ占い師の偽の預言によって決められてしまったのである。ここでも、科学技術への信頼が信仰と化し疑似科学と結び付いている様を認めることが出来よう。ということは、エディーがクラーク社長の娘ジョーンに恋に落ちながらも最終的にはヘレンを恋人、さらには結婚相手として選ぶのも尤もである。インチキな占いによる偽の預言という疑似科学によって科学技術の先端を行く職業である能率技師となった男と、科学的な身体トレーニングと疑似科学である優生学とを結び付けて思考する女が結ばれるのであるから。

『突貫勲太』における科学あるいは科学技術への信頼、更には信仰と疑似科学への信仰が表裏一体となっていることについては、最初のミュージカル・ナンバー「娘よ、屈伸せよ Bend Down, Sister」(DVD, ch.3, 0:03.57-) に登場する「千手観音モチーフ」(木下 2000:238) が、続く降霊会のシーン (DVD, ch.4, 0:07.58-) 冒頭の千手観音の様に腕を多数持った像のショットとはっきりとした類似性を持つことにも着目すべきである。ここでも、科学技術に寄り添う女性の規格化・規律化と疑似科学への信仰が結び付けられている。

更に言えば、能率(向上)技師であるエディーが刑事相手に用いるインチキな催眠術や数え切れないパンの中から現金の入ったパンを一発で見つけ出すという、ほとんどあり得ない偶然を引き起こす能力の内にも、科学技術への信頼、更には信仰と疑似科学への信仰の結合を見出すことが出来る。この点については、最終的に『突貫勲太』において疑似科学とはいかなるものであるのか、そしてエディーとはいかなる存在であるのかという観点から、次により詳細に検討する必要がある。

2.3. 救い主・英雄としてのエディーと疑似科学への信仰

エディーは、クラークス・ベーカリーの従業員達へのボーナスに充てられる現金2万5,000ドルを、それを盗もうとするヨランドとその一味から守ろうと奮闘する。その過程で彼は、現金の隠し場所を聞き出すために彼に催眠術をかけようとする刑事に自らの大きな目をグルグルと回すことで逆に催眠術をかける (DVD, ch.23, 1:07.32-)。

しかし、エディーがパン生地の中に隠し、焼き上がったパンの中に入っているはずの現金は、彼が持ち歩いていたパンの中には入っていなかった。エディーはパンを取り違えたのだ。彼は警察から逃れて、ヘレンとともにクラークス・ベーカリーに向かうが、そこで二人が目にするのは、貯蔵室の製品棚に並ぶ大量のパンである。その中からどうやって現金の入ったパンを見付ければ良いのか。しかし、ヘレンに促されてエディーがたまたま手に取ったパンの中に現金は入っていた。奇跡の様な偶然でもあれば、エディーが奇跡的な能力を持っているかの様でもある。

しかし、そもそもなぜ中心となる舞台がベーカリーに設定され、パンの中に現金が隠されるのか。主たる舞台がベーカリーに設定されるのは、マシーン・エイジにおけるベルトコンベア・システムで大量に生産され

た規格化された製品が、まさに大量にあることが一目で見て取れるからでもあろう。ここには、規格化され大量生産された商品の中に、あるいはそうした製品を生み出す過程の中に宝が眠っている、という教訓^{メッセージ}がある。しかしそれだけでは、舞台が主としてベーカーリーであり、後半特にパンに焦点が当たることの理由が分からない。

主たる舞台がベーカーリーであるのは、むしろパンに焦点を当てる為なのであるが、そこには少なくとも二つの理由があるだろう。第一には、大恐慌下で慈善団体が貧窮者にパンやスープを配っていたのだが、それに並ぶ行列が「ブレッドライン breadline」と呼ばれていたことである。入場料を払って映画を観る客は、ブレッドラインに並ぶ困窮者ではなかったはずだが、ブレッドラインを見掛けることはしばしばあっただろう。製品棚にずらりと並ぶパンやパンを取り合う人々の姿は、観客に大恐慌の現状を思い起こさせずにはいなかったはずだ。“bread”という単語には「生計」の意味もあるのだからなおさらである。

映画の後半でパンの中に現金が隠され、パンに焦点が当たる第二の理由は、エディーが刑事に「現ナマはどこだ。Where is the dough?」と訊かれて、“The dough is in the bread.”と答えるセリフ (DVD, ch.23, 1:07:14) の内にある。このセリフは、文字通りならば「パン生地がパンには入っている。」という意味だが、エディーは「現ナマはパンの中だ。」という意味で言っている。しかし注目すべきは、“bread”という単語にも「現ナマ」の意味があることで、つまり訊いている刑事には、このセリフは「現ナマは現ナマの中にある」というナンセンスなトートロジーにしか聞こえないのだ。しかし、「現ナマは現ナマの中にある」というのは本当に無意味なトートロジーなのであろうか。

エディーとヘレンの二人とヨランドの一味はパンを奪い合い、パンの中の現金が既に抜き出されていることをヨランド達を知ると、今度は現金の奪い合いが始まる。現金は最終的にはエディーの手中となり、クラーク社長を通じてボーナスとして社員に配分されることになるだろう。つまりここには現金の流通が隠喩的に描かれている。(DVD, ch.24, 1:11:23-)

恐慌が悪化して銀行の倒産が増えると、預金を引き下ろしての現金の、あるいはそれを兌換した金^{きん}の退蔵が増えていく。流通する現金（貨幣）は、銀行への預金と銀行からの貸し出しを通じて、信用創造によって流

通量が増大し、経済規模は拡大する。銀行は信用創造によって貨幣から新たな貨幣を生み出すのだ。「現ナマの中に現ナマがある」というセリフは、まさにこうした意味に理解されるべきであろう。この解釈がいささか深読みであるとしても、エディーが、ヨランダの訪問を受けて危機を避けるために一旦は会社の金庫にしまい込んだ現金を、ヨランド一味による盗難を避けるためとはいえ金庫から出して流通させたことは確かであり、またヘレンに対して、大量にあった紙幣の量を減らすためにそれを1,000ドル札に交換したことを語っており（DVD, ch.23, 1:10:55）、その際には銀行を利用したはずで、この両替は信用創造には結び付かないが、銀行が頼りになる存在であることが暗示されている¹⁷⁾。

超人的な能力を発揮してか、あるいはあり得ないほどの幸運によってか、エディーはヘレンの助けを借りてクラークス・ベーカーリーの危機を救い、クラーク社長のパーティーの参加者達からは、社長の娘ジョーンの呼び掛けの下に、「万歳 Hooray!」の三唱で迎えられる。エディーは今やクラークス・ベーカーリーの救い主であり英雄である。彼は、ヨランド一味との戦いを助けてくれたヘレンと恋に落ち、彼女にプロポーズするところで映画は目出度く幕を下ろす。

だが、『突貫勘太』は、クラークス・ベーカーリーの危機とエディーによるその救済を描くのみのものでない。既に述べた様に、クラークス・ベーカーリーのクラーク社長は、その無能さと悪人の跋扈を許す点において、フーヴァー大統領と隠喩的に強く結び付けられており（という事は、クラークス・ベーカーリーはアメリカ合州国の隠喩である）、ヨランドとその一味は、一面においては悪辣な投機家達の隠喩であった。万歳の歓呼の内に迎えられるエディーの姿には、無能なフーヴァー大統領に代わって大恐慌を終結させ、再び好景気をもたらしてくれる強いリーダーシップを持った英雄の出現への大衆の願望が、戯画的な形においてとはいえ投影されている。しかもエディーは、ヨランダの偽の預言と偶然とによってとはいえ、能率（向上）技師 efficiency expert なのである。

宮本陽一郎 2002:178 は、次の様に述べている。

ニューディール期のアメリカの政治に大きな影響を与えたのはテクノクラシーを求める運動であった。「マシーン・エイジ」の未だか

つてない規模の生産力を前提とすれば、本来恐慌はありうべからざる状況であり、「エンジニア」が経済システムを調整して計画経済を導入すれば問題は解決するはずだとする考え方は広範な説得力を持った。

こうした考え方は、ニューディール期以前から存在し、特にソ連が計画経済によって大恐慌の影響を受けていないと（ソ連崩壊以後文書公開が進むに至るまで）信じられていたことは、こうした考え方に強く影響した¹⁸⁾。能率（向上）技師 efficiency expert がまた efficiency engineer とも呼ばれることを想起するならば、エディーは、言わば戯画的に先取りされたフランクリン・D・ロウズヴェルト Franklin D. Roosevelt である（あくまで戯画的になるので、エディーの行動は、強い意志に貫かれているが、科学技術に基づいてはいない）。ただし、大衆はそうした救い主の到来を念願しつつも、その登場については全く希望が持てず、大恐慌がいつ終わるのか想像さえつかない状況だった。ここに、科学あるいは科学技術への信頼、あるいは信仰と表裏一体となって疑似科学がその影響力を強める余地がある。

実際、ヨランダの二つの偽の預言はいずれも結果的には的中するし、エディーの超人的な能力、あるいは奇跡的な偶然がなければアメリカ合衆国の隠喩たるクラークス・ベーカーリーが救われることもなかったであろう。だが、ここで注意が必要なのは、ヘレンの結婚を巡るヨランダの偽預言の成就是、彼女とエディーがともに奮闘した結果であり、この会社を救う男が現れるというクラーク社長に対するヨランダの偽預言が的中するのは、別の男が行くはずが、偶然先にエディーが社長に出会ってしまい、更には、エディーがクラークス・ベーカーリーを救おうとして、奇跡的な偶然（あるいは超能力かと疑われるほどの能力）に助けられつつも、最大限の努力を払って行動した結果である。疑似科学や運のみが結果をもたらすわけではなく、加えて強い意志に基づいた努力と決然たる行動が必要なのである。

エディーは、恐らく「1930年の恐慌」（DVD, ch.11, 00:27.57-）で失業し、ヨランダの一味に加わっていたのだろう。その彼が、偶然に助けられてとはいえ真っ当な職を得て「堅気に戻り」（DVD, ch.12, 0:32.18-）、雇われた会社を救うために奮闘し成功を取める姿は、隠喩的には大恐慌

の終わりを意味し、それをひたすら願望する観客達に強い共感を持って受け入れられたはずである¹⁹⁾。そもそも、映画の原題である *Palmy Days* が「全盛時代、輝かしい時代」を意味するのであり、それは1920年代の好景気の回顧ではなく、来たるべき好況期への期待を含意しているのである。

恐慌が更なる悪化を続け、いつ終わるとも知れない中で『突貫勘太』を観ていた当時の観客達は、疑似科学や偶然に縋りたいと思いつつ、疑似科学の悪の側面や努力の必要性も認識しており、とはいえどう努力していいのかも分からず先の見えない中で、事態を打開してくれる救い主、強いリーダーシップを持った知的な英雄の出現を願っていた。こうした観客の願いや認識は、多様な側面を持つ臍気なものであったが、『突貫勘太』はそうした観客の認識を受け止め、その儚い願いに、スラップスティック・コメディドタバタ喜劇という戯画的な形においてはあるが応えている。それがこの映画がこの時期のミュージカル映画としては異例の大ヒットとなった大きな要因ではないか。²⁰⁾

結論

『突貫勘太』が与えるメッセージ教訓は次の様に整理出来よう。

1. 大恐慌は、いつ終わるか分からないが、いつかはきっと、あるいは多分終わるだろう。
2. 大恐慌を終わらせるには、疑似科学や運にさえ頼る必要がある。それに加えて努力が必要である。どのように努力すれば良いのかは不明であるが、取り敢えずとにかく闇雲に努力する必要がある。
3. 大恐慌を終わらせるためには、現金は、そのまま、あるいは金きんに兌換して退職するのではなく、流通させ、銀行を通じて流通量を増やさなければいけない。ただし、銀行がいつ信頼出来るようになるかは不明である。とはいえ、銀行は本来は信頼に値する存在である。
4. 科学技術に基づいた計画的な経済政策によって大恐慌を終わらせる、知的な能力に秀でた英雄的なリーダーの登場が待ち望まれる。そうしたリーダーが本当に現れるか、いつ現れるかは分からないが、現れて欲しいし、多分現れるだろう。

こうした教訓は、『突貫勘太』においてはあくまでも戯画的に示され

るのみであった。具体的な希望が存在したわけではないからであり、既に述べた様に、この映画の公開中にも大恐慌は悪化の度を増すばかりであった。

1932年に至ると、ニューディール政策を唱えるフランクリン・D・ロウズヴェルトが民主党の大統領候補となり、先述した様にフーヴァー大統領の評判が地に落ちていたこともあって（注（11）も参照）、11月の大統領選挙での勝利が選挙前から確実視されていた。これを受けて、大恐慌は1932年にほぼ底を打ち、32年から33年にかけて様々な経済指標（自動車生産、鉄鋼生産、卸売物価指数、労働者雇用指数、月別株価指数等々）が少しずつ回復する（林 1988:81 の図 8, 88 の図 9 と 10、秋元 1999 → 2009:27 の図 1）²¹⁾。

ワーナー・ブラザーズは、1934年3月4日のロウズヴェルトの大統領就任式（*inauguration*）から一週間後の3月11日に、『四十二番街』*42nd Street*（ロイド・ベーコン監督、ミュージカル・ナンバーの振り付けと演出はバスビー・バークレー）を公開する。*Photoplay Magazine* 4月号掲載の宣伝では、「エンターテインメントでニューディールを開始！ *Inaugurating a New Deal in ENTERTAINMENT!*」という文字が躍り（*Fumento* 1980:39）、この映画の公開がロウズヴェルトの就任にタイミングを合わせてのものであることが分かるが、内容的にも²²⁾、舞台ミュージカルに初めて出演した新人ダンサーであるペギー・ソーヤー *Peggy Sawyer*（ルビー・キーラー *Ruby Keeler*）が、主演女優の開演前夜の足の怪我で急遽代役を務めることになり、大成功を収めるというもので（突如現れた新星が、いきなり降りかかって来た危機をその隠れていた能力で救うのだ）、演出家のジュリアン・マーシュ *Julian Marsh*（ワーナー・バクスター *Warner Baxter*）がウォール街での株の暴落で財産を失い健康も害してボロボロになって、このミュージカルの成功に再起を賭けているという設定も相俟って、大恐慌の終結への現実性のある期待を強く印象付けるものとなっている。『突貫勘太』の公開時とは異なり、1932年の夏以降には、はっきりとした希望があったのだ。映画は大ヒットし、第二次ミュージカル映画ブームが到来することとなるが、それはまた別の話である。

注

- 1) ただし、ゴールドマンとスピヴァクによれば、ナンバー「僕の可愛い人は全てが最高さ There's Nothing Too Good for My Baby」にはパークレーは関わっておらず、演出はマーヴィン・ルロイ Mervyn LeRoy で (Goldman 1997:140, Spivak 2011:55)、振り付けは不詳であるが、おそらくブラックフェイスで歌い踊るエディー・カンター自身であろう。
- 2) 撮影期間は、7月以降にバスビー・パークレーがすることがなくなった、7月にはポストプロダクションが行われていたとのスピヴァクの記述 (Spivak 2011:55-56) からの推定である。ただし、ゴールドマンは、撮影は7月まで長引き、プレビューでの評判を受けてマーヴィン・ルロイを呼んでのミュージカル・ナンバーの追加撮影 (注1参照) と再撮影が行われたと述べている (Goldman 1997:140)。マーヴィン・ルロイ演出による追加撮影と再撮影が行われたことはスピヴァクも認めているので (Spivak 2011:55)、6月中に一旦撮影が終わり、7月中に追加撮影と再撮影が行われた可能性が高い。
- 3) 公開はニューヨーク・シティでは1931年9月23日、その他の地域では同年10月3日である。Cf. *Internet Movie Database*.
- 4) こうした概観や状況の把握の上で特に参照したのは林敏彦1988と佐美光彦1994である。
- 5) カスタードパイはドタバタ喜劇で多用されることから (実際は多用されるのは皿に盛られたクリームであるが)、ドタバタ喜劇のギャグを含む場面も指し、ここでは複数形であることから、『突貫勘太』全体がドタバタ喜劇であることを含意していると考えられる。
- 6) その終わりがいつであるかは、映画史研究者の間でも意見の分かれるところであろう。
- 7) ロッコ・フメントウは、1931年と32年に本当に人気のあったミュージカル映画としてわずか6本の作品を挙げているが、その中に『突貫勘太』が、やはりエディー・カンター主演の『カンターの闘牛士』*The Kid from Spain* (レオ・マッケリー Leo McCarey 監督、ミュージカル・ナンバーの振り付けと演出はバスビー・パークレー、1932年) とともに含まれている (Fumento 1980:24)。なお、この時代はそもそも映画にとって冬の時代であり、廉価な入場料であった映画に大恐慌の影響が及ぶのは1931年になってのことであるが (Morgan 2016 → 2018:4)、1927年から30年の間は年間およそ1億1,000万人であったアメリカの映画館における観客数は、1933年には約6,000万人にまで落ち込む (Fumento 1980:23)。
- 8) 株式の金額の25%未満の現金での購入が可能なのは、信用買い (カラ買) など含まれているためと思われるが、詳細は不明である。
- 9) 追加証拠金を払うことが出来なかった何千人という小口の投機家たちが

破滅した。トマス&モーガン=ウィッツ 1998a:235を参照。

- 10) 但し侘美 1994:591-592は、世界経済の「悪循環的縮小過程」はアメリカでの恐慌発生に伴う必然的な結果であったことをも指摘しており、とするならば、スムート・ホーリー法はそれを決定的なものとする強力な一押しと見做すべきであるかもしれない。
- 11) フーヴァーのイメージを決定的に最悪なものとするのが、1932年7月28日に、ダグラス・マッカーサーに命じてボナス・アーミーを鎮圧し、そのキャンプが完全に焼き払われる中死者2名を含む大量の死傷者を出した「ワシントンの戦い」であるが、ボナス・アーミーとワーナー・ブラザーズ期のバスビー・パークレー振り付けのミュージカル映画との関連については、宮本陽一郎 1997→2002を参照。
- 12) 例えば日本では、優生学に基づいて1930年代以来ハンセン氏病患者の終身強制隔離と断種手術が行われ、断種は実に1992年まで続き、強制隔離を定めた「らい予防法」が廃止されたのは1996年のことである。ハンセン病国賠弁護団、「ハンセン病 Q&A 国の政策について」(ウェブサイト)を参照。しかし、不良な遺伝子を残す必要は無いという優生学的な発想は、いまだにインターネット上等に溢れている。
- 13) 「体操、運動、トレーニング」の意味の俗語“physical torture”からのものじりであるが、文字通りには「身体拷問家」の意味である。実際ヘレンは、エディーを身体的拷問と呼ぶべき仕方では鍛えようとし、その拷問はルドゥー教授に扮したエディーによるヨランドへの拷問として反復される。
- 14) セリフの聞き取りとその含意について、匿名の査読者からの指摘を受けて修正を加えた。記して感謝する。
- 15) マシーン・エイジとバスビー・パークレーがミュージカル・ナンバーを振り付け・演出したワーナー期の一連の映画の関係については、宮本 1997→2002を参照。マシーン・エイジにおける科学技術への信頼は、今確認した通り既にサミュエル・ゴールドウィン期のパークレーの映画にも見られるものである。
- 16) なおこの文脈に於いて、映画の冒頭にクラークス・ベーカーリーの建物に掲げられている標語の一つ「良家の子女のためのパン Bread for the Well Bred」(言うまでもなく“bread”と“bred”の洒落である)にも優生学的な含みを読み取ることは決して深読みではない。“well-bred”という単語は、馬や犬に関して使われる場合には「良種の、血統の良い」という意味を持つからである。
- 17) とはいえ、先述した様に、『突貫勘太』の公開中に第二次銀行恐慌が悪化し、銀行の倒産が相次いで、その後第三次銀行恐慌も発生し、取りつけ騒ぎはフランクリン・D・ロウズヴェルトが大統領に就任する1933年3月4日の直前まで続いた。

なおこの点に関しては、ロウズヴェルトが大統領になって行った最初の政策が、アメリカの全ての銀行を閉鎖し、安全性の確認された大銀行から順次再開するというものであったことをも想起する必要がある。この政策の結果、取りつけ騒ぎは収まり、銀行の預金額は増加に転じた。(林 1988:125-128) 退蔵されていた現金、あるいは金^{きん}が預金に変わったのである。なお、ロウズヴェルトは3月12日の炉辺談話の中で、国民に銀行の閉鎖と再開に関する政策を懇切丁寧に説明し、「私が保証しますが、お金は、マットレスの下に置いておくよりも再開した銀行に預けた方が安全です。」という名言を残している (Roosevelt 1933)。

- 18) ただし、アメリカ国民はソ連型の共産主義ではなく、アメリカニズムの下に発展した大量生産方式に基づく経済改革を志向していた点には注意が必要である。
- 19) この点では、エディーが社員にボーナスとして配分される現金2万5000ドルを初めて見たときに、「遂に繁栄がやって来た！ Prosperity at last!」と言っていることも注目に値する (DVD, ch.17, 0:47.39-)
また、エディーを演じるカンターが、ウォール街での株の暴落で財産を失ったことは、1929年に彼が出した小冊子 (Cantor 1929 → 1940) で知られており (この小冊子を「原案」とした同名の映画 *Caught Short* (1930) さえ製作されているが (cf, Fisher 1997:85)、木村は未見である) このことも観客の共感を強めただろう。カンターは脚本にも加わっていて、ギャグを増やすなどの修正を多数行ったのだが (Spivak 2011:54)、そこには彼自身の体験が反映されているだろう。
- 20) 勿論、仁井田千絵 2008 が指摘する様に、『フーピー』 *Whoopie!* (ソントン・フリーランド Thornton Freeland 監督、ミュージカル・ナンバーの振り付けと演出はバスビー・パークレー、1930年) の後にカンターがラジオで人気を得ていたことも『突貫勘太』のヒットの重要な要因であることを忘れてはならない。
- 21) ただし、アメリカが大恐慌を抜け出してその経済が本格的に回復するのは、1941年12月に第二次世界大戦に参戦してからのことであり、その間1938年には景気後退に見舞われるなど、ニューディール政策の実績は十分というにはほど遠かった (林 1988:166)。
- 22) トリートメント (ストーリーのやや詳しく目の梗概) の第1稿 (38頁) は1932年8月16日に完成しワーナー・ブラザーズに送られており (Fumento 1980:14)、9月下旬から撮影が始まり、11月上旬に完成している (Ibid.:21)。

人名等の固有名の表記は、原則として人口に膾炙したものをを用い、必要に応じて原綴を付した。

DVDのチャプターとタイムコードは、参考映像として出典を示したワーナー・

アーカイヴ・コレクションのDVDのものである（なお、このDVDはリージョンフリーである）。

英語のセリフの翻訳は筆者によるが、丸紅（東芝EMI）版のVHSの字幕（字幕担当者不詳）を参考にした箇所がある。

参考映像

Palmy Days (DVD), in *Eddie Cantor: 4-Film Collection*, Warner Archive Collection, 2015.

『突貫勘太』（VHS）、丸紅（販売元：東芝EMI）、1989.

引用文献と主な参考文献

秋元英一 1999 → 2009, 『世界大恐慌 1929年に何がおこったか』, 講談社選書メチエ → 講談社学術文庫.

池内了 2008, 『疑似科学入門』, 岩波新書.

石川幹人 2016, 『なぜ疑似科学が社会を動かすのか ヒトはあやしげな理論に騙されたがる』, PHP新書.

伊勢田哲治 2003, 『疑似科学と科学の哲学』, 名古屋大学出版会.

木下千花 2000, 「万華鏡と航空写真 バスビー・パークレーとモダニティ」, 小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール⑤ メディア 表象のポリテクス』, 東京大学出版会, pp.217-246.

佐美光彦 1994, 『世界大恐慌—1929年恐慌の過程と原因—』, 御茶の水書房.

G・トマス & M・モーガン＝ウィッツ 1998a, 『ウォール街の崩壊（上）ドキュメント 世界恐慌・1929年』, 常盤新平訳, 講談社学術文庫.（原書は1979年刊）

G・トマス & M・モーガン＝ウィッツ 1998b, 『ウォール街の崩壊（下）ドキュメント 世界恐慌・1929年』, 常盤新平訳, 講談社学術文庫.（原書は1979年刊）

仁井田千絵 2008, 「ラジオの声とスクリーンの身体—1930年代アメリカにおけるスターの表象」, 『映画学』, 21号, 61-70.

林敏彦 1988, 『大恐慌のアメリカ』, 岩波新書.

ハンセン病国賠弁護団, 「ハンセン病 Q&A 国の政策について」,

<http://www.hansenkobukai.gr.jp/faq/policy.html> (2019年1月31日アクセス)

宮本陽一郎 1997 → 2002, 「大衆—バスビー・パークレーのミュージカル映画と「忘れられた男」」, 浅沼圭司・谷内田浩正編『思考の最前線 現代を読み解くための20のレッスン』, 水声社, pp.263-284. 改稿の上, 宮本陽一郎 2002:171-195に「第六章 Machine Age Dancing—大衆の身体—」として所収.

宮本陽一郎 2002, 『モダンの黄昏 帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』,

- 研究社.
- Bergman, Andrew 1971 → 1992, *We're in the Money. Depression America and Its Films*, New York University → Elephant Paperbacks.
- Cantor, Eddie 1928/1957 → 2000, *My life is in your hands ; & , Take my life : the autobiographies of Eddie Cantor*, with David Freeman and Jane Kesner Ardmore, Harper & brothers/ Doubleday → Cooper Square Press.
- Cantor, Eddie 1929 → 1940, *Caught Short! A Saga of Wailing Wall Street*, Simon and Schuster → Amereon.
- Cantor, Eddie 1963, *As I Remember Them*, Sloan and Pearce.
- Cohen, Harvey G. 2018, *Who's in the Money. The Great Depression Musicals and Hollywood's New Deal*, Edinburgh Univ. Press.
- Fisher, James 1997, *Eddie Cantor. A Bio-Bibliography*, Greenwood Press.
- Fumento, Rocco 1980, "Introduction: From Bastards and Bitches to Heroes and Heroines," in Fumento (ed.) 1980:9-52.
- Fumento, Rocco (ed.) 1980, *42nd Street*, the Univ. of Wisconsin Press.
- Goldman, Herbert G. 1997, *Banjo Eyes. Eddie Cantor and the Birth of Modern Stardom*, Oxford Univ. Press.
- Internet Movie Database*, <http://us.imdb.com/> (2019年1月31日アクセス)
- Morgan, Iwan 2016 → 2018, "Introduction: Hollywood and the Great Depression," in Morgan & Davies 2016 → 2018:1-25.
- Morgan, Iwan & Philip John Davies (ed.) 2016 → 2018, *Hollywood and the Great Depression. American Film, Politics and Society in the 1930s*, Edinburgh Univ. Press.
- Pike, Bob & Dave Martin 1973, *The Genius of Busby Berkeley*, cfs books.
- Roosevelt, Franklin D. 1933, "On the Banking Crisis," <https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches/march-12-1933-fireside-chat-1-banking-crisis> (2019年1月31日アクセス)
- Rubin, Martin 1993, *Showstoppers. Busby Berkeley and the Tradition of Spectacle*, Columbia Univ. Press.
- Spivak, Jeffrey 2011, *Buzz. The Life and Art of Busby Berkeley*, the Univ. Press of Kentucky.
- Terkel, Studs 1970 → 1971, *Hard Times; An Oral History of the Great Depression*, Pantheon Books. → Avon.
- Thomas, Tony & Jim Terry with Busby Berkeley 1973, *The Busby Berkeley Book*, foreword by Ruby Keeler, New York Graphic Society.
- Weinstein, David 2017, *The Eddie Cantor Story: A Jewish Life in Performance and Politics*, Brandeis Univ. Press.

本論文は、2016年度-2017年度成城大学特別研究助成「『突貫勘太』(1931)における疑似科学：1931年の時代状況との関連において」の成果である。